

## 「ヌード NUDE —英国テート・コレクションより」展

横浜美術館（横浜みなとみらい） 2018.03.24～06.24



本展は、西洋近現代美術コレクションで名高い英国のテート・コレクションから「120点余りのヌードの名品」を選びすぎり、日本国内の作品「約10点」を加えて、“西洋美術200年にわたる裸体の歴史をひもとく”ものである。

プロテスタントで性倫理に厳しい英国は、基本的には表現の伝統に乏しかったが、19世紀に本格的に裸体画が制作されるようになって、物語性や道徳的教訓を重視した官能性を抑えた「品位ある裸体画」が推奨された。

本展は、現代の視点から裸体芸術の歴史をとらえ直した意欲的な内容で、裸体表現やヌードをめぐる表現が時代とともに変化し、芸術表現としてどのような意味を持つのかを絵画、彫刻、版画、写真などでたどっている。

オーギュスト・ロダン 《接吻》 ペンテリコン大理石 彫刻

ダンテの『神曲』に登場するパオロとフランチェスカの悲哀をモチーフにし高さ74cmの銅像は、1893年にシカゴでの万国博覧会に出展されたが、全裸の男女が抱擁する様子が公衆の前に展示するには、当時はふさわしくないとされた。

その後、男女愛を永遠にとどめた「大理石像の接吻」が初公開されたのは、1898年のサロン・ド・パリであったが、当初の批判とは逆に“高い評価”を受けたいきさつがあり、等身大の迫力ある作品が初公開されることで注目されている。ドレイパー《イカロス哀悼》 1898年 油彩/カンヴァス



「ハーバード・ドレイパー」(1863～1920)は、神秘的な作品を得意としたラファエル前派画家で、作品には透明感のある光の効果と優れた形体把握が忠実に反映されている。

本作は、「国家買い上げ絵画」であり、3人のニンフたちが寄り添ってイカロスの死を悼む画面で、横たわる青年の美しい肉体を中心モチーフに、美しいニンフたちの妖艶な裸体をその陰に巧みに隠して官能性を抑制し、物語の場면을ドラマチックに描き出している。

### 【他の主な展示作品】

ドガ《浴槽の女性》 1883年頃 パステル/紙

レイトン《プシュケの水浴》 1890年頃 油彩/カンヴァス

ターナー《ベッドに横たわるスイス人の裸の少女とその相手》 1802年水彩/紙